学位論文要旨

戦争俳句アンソロジーの研究

広島大学大学院人間社会科学研究科
教育科学専攻教師教育デザイン学プログラム
国語文化教育学領域

学生番号　D203296　氏名　樫本由貴

【論文要旨】

本論文は、1930年代から50年代にかけ、戦争に関連するテーマに基づいて制作された俳句アンソロジー[1]を研究対象にして、戦争俳句アンソロジーが戦争をどのように表象したのかを明らかにするものである。そのために、まず戦争俳句アンソロジーの成立のポリティクスを明らかにする。

研究対象の設定にあたっては、山之内靖による総力戦体制論[2]や戦後文化運動論[3]が指摘する「戦中」と「戦後」の連続性を参考にした。本論の主な研究対象は、第一部では、いずれも俳句総合誌『俳句研究』(改造社)に掲載された戦争俳句アンソロジー『支那事変三千句』(1938,11)、『支那事変新三千句』(1939.4、以下『新三千句』とする)である。第二部では、原爆俳句アンソロジー『句集広島』(句集広島刊行会編、近藤書店、1955)、『句集長崎』(句集長崎刊行委員会編、平和教育研究集会事務局、1955)である。

これらは戦中、戦後に制作されたものであり、第一部の研究対象と第二部の研究対象は思想としては対立している。しかし、有名・無名作家にこだわらず多数の媒体から俳句を収集した超結社的な振る舞いと、政治的イデオロギーを主目的に俳句を収集したことの二点は共通している。現代詩の問題に視線を移せば、鮎川信夫による『死の灰詩集』(現代詩人会編、宝文館、1954)への批判が思い起こされよう。この指摘の妥当性については、坪井秀人や竹内栄美子による先行論[4]を踏まえる必要があり、留保が必要だろうが、戦争俳句アンソロジーの成立や形式には戦中・戦後にかけて類似点がある。そしてそもそも俳句は季語を代表としてとある共同体で共有される「前提」ありきの文芸であり、特に季語の元に形成される共同体は戦中戦後の断絶を経験していない。「原爆忌」「敗戦忌」といった戦後に生まれた言葉が、季語として歳時記に組み込まれ、受け入れられている現状からは、俳句が現代詩と

---

[1] 本論ではこれを「戦争俳句アンソロジー」を呼称する。また、本研究では、「戦争俳句」という呼称で広義に捉えておく。なお「戦争俳句」を日中戦争以降の俳句用語とする捉え方は村山古郷・山下一海編『俳句用語の基礎知識』(角川選書、1984)や山下一海ほか編『現代俳句大事典』(三省堂、2005)等で見られ、一般的なものである。

[2] 伊豫谷登士翁、成田龍一、岩崎稔編『総力戦体制』(筑摩書房、2015)など。

[3] 宇野田尚哉、川口隆行、坂口博ほか編『「サークルの時代」を読む　戦後文化運動への招待』(影書房、2016)

[4] 坪井秀人『声の祝祭――日本近代詩と戦争』(名古屋大学出版会、1997)、『戦後表現――Japanese Literature after 1945』(名古屋大学出版会、2023)、竹内栄美子『中野重治と戦後文化運動――デモクラシーのために』(論創社、2015)など。

同様の戦争と反戦の精神の連続性の問題を抱えていると推定できる。であれば、そこに対しての検証や批評が必要であろう。

さらに、品田悦一『万葉集の発明　国民国家と文化装置としての古典』（新曜社、2001）や、松澤俊二『「よむ」ことの近代　和歌・短歌の政治学』（青弓社、2014）などの和歌・短歌アンソロジーに対する論考は、俳句アンソロジーに対しても有効であろう。とりわけ松澤論は、和歌・短歌のアンソロジーが戦時期において国威発揚や、愛国心を瀰漫させる作用を持ったことと、それらを生み出した編集の力学を、時代背景や出版状況などのメタ的な要素も加味しながら論考している。松澤論の研究対象に類する俳句アンソロジー自体は、日露戦争時に瀬川疎山編『戦争俳句――附・時局川柳』（帝都社、1904）[5]が成立して以降、複数制作されているが、これらに対する研究はほとんどない。既存の俳句研究は史的研究や[6]一個人の表現がいかに既存の俳句表現を革新したかに力点を置くもの、膨大な資料の整理・紹介に留まるものがほとんどである。以上の理由から、戦争俳句アンソロジーにおける戦争表象を明らかにするために、まず戦争俳句アンソロジー成立のポリティクスを明らかにする必要がある。これは既存の俳句研究や文化・文学研究に貢献するであろう。

次に、戦争俳句アンソロジーの戦争表象を明らかにすることは、戦争俳句に関する研究の射程を拡張することに資する。

現状、1930 年代以降の俳句に注目した研究の代表には、川名大の研究を挙げる事が出来る。川名は、1930 年代前半から始まる新興俳句運動から戦後の前衛俳句に至るまでの流れを、表現や文体の更新という視点から論じ[7]、新興俳句運動が戦争表現と合流することによって、新興俳句運動が取り入れた新詩精神がさらに成長したことを指摘する。[8]川名は、新規性の高い、類型に収まらない表現に注目し、有名作家の俳句表現の評価を脱構築するのみならず、表現に注目することによって無名の作家までを発見した。川名の研究は俳句表現史

---

[5] 「序」（2－3 頁）によれば、「空前の大戦争に対して如何なる歩調を取り」「文学の上に報国の情を披瀝」していることを示すために新聞や結社誌、さらには「所々に於ける俳句会の句稿または私信」を集めて制作された。

[6] 松井利彦『新稿昭和俳句史』（東京四季出版、2003）や村山古郷『昭和俳壇史』（角川書店、1985）など。

[7] 『昭和俳句　新詩精神の水脈』（有精堂出版、1995）、『昭和俳句の検証』（笠間書院、2015）など。

[8] 『モダン都市と現代俳句』（沖積舎、2002）、『挑発する俳句　癒す俳句』（筑摩書房、2010）など。

の構築として結実している。

川名のように、俳句という詩型が蓄積し、制度化してきた表現に注目してそれを内面化したうえでさらに更新まで達成した無名の作家を発掘することは意義深い。一方で、川名の研究の問題点は、川名が「俳句の価値は表現領域や表現方法のいかんを問わず、俳句形式の独特の構造を最もよく生かして、俳句としての言葉の力を最もよく発揮せしめたところにしかない」[9]というポリシーを持つがゆえに「文学としての俳句」の要素を満たさない作品と、そういった作品を書く作家に無関心であるという点である。川名は多くの無名の作家を「文学として」未熟と打ち捨てており、本研究が取り上げる戦争俳句アンソロジーもそのうちの一つである。[10]川名が俳句を読解し、評価し、位置づける際に適用する基準は「俳句形式の独特の構造を最もよく生か」し「俳句としての言葉の力」を発揮しているか否かである。ゆえに、川名の基準を転用するだけでは、戦争文学として位置付けられるべき作品をも見落とす危うさがある。そのため本研究はテキストデータを作成・利用して論述の起点となる表現を持つ俳句を見出し、その俳句表現の射程を戦争文学としても捉えた。俳句表現が俳句表現としてだけではなく、ことばによって戦争を表現することの一つの方法としてどのような射程を持ち得ていたのか明らかにすることで、これまでの俳句表現に対する研究とは異なった視点を提出することができるだろう。

最後に、俳句アンソロジーには川名が「文学としての俳句」の「価値」がないとして評価の枠外においた、多くの人々の俳句が収録されているが、このような人々の俳句に対する研究には、阿部誠文『朝鮮俳壇　上下』（花書院、2003）、『ある俳句戦記・・詩華集にみる従軍俳句』（花書院、2000）、西田もとつぐ『満洲俳句　須臾の光芒』（リトルズ、2020）などがある。中根隆行や磯田一雄は、阿部や西田の研究を基盤として、戦後の朝鮮や台湾における日本語俳句の動向と中心的な作家の成した役割を社会状況と結びつけながら明らかにし

---

[9] 「あとがき」『モダン都市と現代俳句』（沖積舎、2002、240 頁）

[10] 例えば、『昭和俳句の検証　俳壇史から俳句表現史へ』（笠間書院、二〇一五）では、『支那事変三千句』は批判精神やリアリズムの追求といった個々の作家に見られる表現上の達成の論拠としてではなく「国家とメディアによって「忠君愛国」を合言葉にした戦意高揚の国民感情が醸成せしめられた」当時を反映し「その国民感情に同化した」作品を抜粋・紹介するために扱うに留まる（35 頁）。

ている。[11]しかし阿部や西田による研究は、そもそも膨大な、そして散逸した一次資料を収集・分析する必要に迫られ、多くが資料の紹介に陥っている。そして中根や磯田の研究は周縁に位置する俳人を取り上げながらも、突出した一個人の表現に集中してしまっている。これは、その人物を俳句史に位置付けることから始めなければならない基礎研究であることと、俳句史を構築する際にテキストを起点に論じる場合、どうしても代表的な、あるいは突出した表現を論点にする必要があり、そうした表現を書く人物は集団においてごく一部に限られるという背景がある。[12]

本研究は、アンソロジー内部の俳句のうち特徴的な使用をされる言葉やモチーフに注目して論を展開した。その際には、川名が注目したような「俳句として」特筆すべき表現に言及しつつも、一句一句の俳句の表現を俳句表現史に位置付けていくことは目的としない。本研究が見出そうとするのは、俳句という形態で表れた戦争に関する個人的な表現が、アンソロジーという形式の中に蓄積されることによって、俳句アンソロジーがどのような戦争表象を提出し得たのかということである。[13]つまり、本論文は既存の俳句研究が積み上げてきた枠組み内での「文学としての俳句」としての価値だけでなく、戦争文学をはじめとして、これまでの俳句研究がまなざしを向けていなかった文学の方面における俳句の価値づけを模索するものである。以下に、各章の成果を述べる。

第一章では、日中戦争期に編纂された戦争俳句アンソロジー『支那事変三千句』と、その編者である俳人の島東吉を研究対象とし、アンソロジーに収録された俳句の実際と、編集意

---

[11] 中根隆行「李桃丘子と俳句：朝鮮俳句の解放／敗戦前後から現在へ（特集　文化翻訳／翻訳文化）」『跨境　日本語文学研究』（第三号、東アジアと同時代日本語文学フォーラム×高麗大学校 GLOBAL 日本研究院編、2016、51－62 頁）、磯田一雄「戦後台湾俳句小史（一）　戦前期台湾の国語教育と俳句・短歌：生活表現の「日本化」・「近代化」」『成城文藝』（第二三九号、至文堂、2017.4、86－55 頁）など。

[12] 『「サークルの時代」を読む　戦後文化運動研究への招待』の第一〇章「シンポジウム　サークル詩をどう読むか」では、「文学」と「へたな詩」をめぐる問題のなかでサークル詩をどのように評価するかという問題が提起されている。

[13] モーリス・アルヴァックスが提唱した集合的記憶と想起文化についての解説書である『集合的記憶と想起文化　メモリー・スタディーズ入門』（アストリッド・エアル著、山名淳訳、水声社、2022）の第六章に「「集合的テキスト」のアプローチが基盤とするのは、想起をめぐる現在の議論における（多くの場合、大衆的な）文学作品の役割であり、文学作品における過去の具象表現であり、またどのようにして文学作品が集合的歴史イメージを変形させるのかという問題である」（225 頁）とある。本研究も俳句、そしてアンソロジーという「集合的テキスト」における戦争表象について探求するものと言える。

図の相克を明らかにした。編者の島が『支那事変三千句』を通して俳壇全体が戦争に協力していく姿勢であることを示すことに腐心していた一方、アンソロジーの内部で戦時下の抑圧を表現する俳句を、特に銃後に注目して読解し、掲げられた俳句報国や商業的目的を果たすための統制をかいくぐる一面があることを明らかにした。

第二章では、戦線篇でたびたび使用される「渡河」という語を中心に、大陸の自然が、兵士たちに特殊かつ異質なものとして認知されていたことを実証的に明らかにした。「敵」「中国」表象に検討の幅を広げ、戦線篇での「敵」の表象には、敵の生死が大きく関わっていることを指摘した。一方、銃後篇では、敵への想像力の養成の難しさに触れた。最後に、片山桃史の『新三千句』から脱落している句を示し、『支那事変三千句』『新三千句』が構築しようとした「中国」像を照らし出した。

次に、第三章では、語彙に注目して日中戦争期の俳句の「死」の表現を分析した。「屍」は戦線篇で、「遺骨」は銃後篇で使用が多く、「英霊」は、全て銃後篇で出現している。これらを基に、戦死者と俳句の書き手はどのような関係を結ぶのかに着目した結果、「屍」「遺骨」では戦死者と遺族や戦友などが結んでいた特別な関係が保持されていたのに対し、「英霊」を用いた語彙では戦死者の特別な関係は剥奪されたことを明らかにした。最後に、高屋窓秋の連作を取り上げ、アンソロジーの力学と読者の可能性について述べた。

次に、第四章では、「聖廃墟」という語を用いて長崎の被爆遺構である浦上天主堂を表現した水原秋櫻子に注目した。秋櫻子の長崎での旅吟の生成過程を辿り、秋櫻子の原爆表象に対する論理をダークツーリズムの議論を援用しつつ検討した。そして、このような秋櫻子の論理と共に「聖廃墟」という語彙を受容し、用いた書き手とその表現を検討するため、長崎の原爆をテーマにした俳句のアンソロジーや、俳句大会で詠まれた俳句から、「聖廃墟」を使用した句を抄出・検討した。その上で広島の「原爆ドーム」の俳句の検討からは、人的被害に留まらない核兵器の被害範囲を示していると読める俳句の可能性を見出した。

次に、第五章では、原爆作家として知られる原民喜の俳句創作について検討した。原の俳句が「原爆作家」原民喜の創作として受容されていく受容の様相を実資料から明らかにした。また、原の俳句が俳句の文脈でのリアリティとはかけ離れていると指摘したうえで、原の原爆俳句が、〈夏の野に幻の破片きらめけり〉や〈吹雪あり我に幻のちまたあり〉に見いだされるように、「幻」を見ることや抒情性を志向するものであることを指摘した。そして、原

の俳句と散文作品特に「鎮魂歌」との連続性を見出した。

次に、第六章では、1955 年代当時、イメージの形成期にあった「原爆乙女」「原爆孤児」の二つの原爆表象に注目し、俳句におけるイメージを明らかにした。そして、「神」「アメリカ」「敵」を表す語彙に対しても、これらを通して原爆による加害はどのように描かれたのか、そして、それを表現する書き手たち自身は、自らをどのような立ち位置に置いていたのかを、当時の原水爆に関わる言説と俳壇の関係も視野に入れて明らかにした。

第七章では原爆俳句アンソロジーにおいて「死」がどのように表象されているのかを明らかにした。関東大震災に接した高濱虚子による「忌日」についての考えを先行研究から整理したうえで、「原爆忌」が原爆の表象不可能性に留意しつつ死者の「弔いの場」を呼び込むための忌日季語の試みの一つと考えられると指摘した。そして、原爆俳句アンソロジーの収録句を対象に、「原爆忌」を用いた俳句を五つに分類し、精読を加えた。50 年代の社会運動下では、1945 年の被爆への想像力が、第五福竜丸の被爆被害が眼前に現れる形で促された。そもそも季語は人々の共通概念によって成立している。50 年代の「原爆忌」には、社会運動で共有された人々の問題意識が如実に反映されたと言えるだろう。

結章では、研究成果として、「文学としての俳句」の再定義と、「戦争俳句を読む」方法の更新について述べた。前者については、本研究が対象とした俳句の数々が、理想的な「名句」が想定される「文学としての俳句」の枠組みからは逸れるものでありながら、それらの著述との関係、関わり方としての「文学」と捉えられることを示し、テリー・イーグルトンの言う所の「機能論的用語」として「文学としての俳句」を再定義した。後者については、本研究が提示した読みが、戦争や原爆についての複雑な語りを解きほぐすための、戦中/戦後、生/死といった二項対立的な読みから脱却するための方法として、現在に至るまで俳句の主流な読み方である一句一句の鑑賞とは別の形であり得ることを述べた。